

天幕上腫瘍

町田 徹* 前原 忠行**

われわれの施設にコンピュータ断層撮影 (CT) が導入されて、すでに約 5 年が経過した。その間に多数の臨床例が経験され、いまや脳腫瘍のみならず脳疾患の診断に CT は欠くことのできない検査手段としての位置を占めるに至った。とくに腫瘍の検出率は高く、造影後の CT を行くと、ほとんど 100% に近い診断率を得ることができる。しかし、腫瘍の質的診断に関しては、血管造影や断層撮影による情報が非常に大切である。

本稿では天幕上腫瘍について述べるが、まず他検査との比較という意味で CT と血管造影などの相違点に触れ、各腫瘍の組織別の CT 所見は後でごく簡単に解説するにとどめる。したがって、掲載される症例は必ずしも組織別に配列されるわけではないので、一部前後することもあり、いささか見にくい点もあるかもしれない。最初にお断わりしておく。

* Tohru MACHIDA 東京大学医学部・放射線科

** Tadayuki MAEHARA 同放射線科講師